

ネパール地震緊急救援活動（先遣隊～初動班）

大阪赤十字病院 看護師 矢野 佐知子

■ はじめに

2015年4月25日、日本時間の午後3時頃、ネパールでM7.8の大地震が発生しました。日本赤十字社は翌日に先遣隊を、続いて緊急支援チームを約3ヶ月に渡り派遣しました。私は先遣隊及び緊急支援チームの初動班として、現地で約6週間活動しました。

ネパールは、北は中国、南はインドに挟まれた、人口約2,700万人の国です。国土の約80%が丘陵・山岳地帯という地形的な特徴から、洪水や地滑り、地震など災害が多く、また生活環境や済状況から、災害に脆弱な国とされています。このため、今回の地震による被害も甚大で、被災者総数は560万人、犠牲者は8,898人と報告されています。

■ 派遣要請から現地到着まで

私は発災直後の4月25日午後9時頃、大阪赤十字病院の国際医療救援部から連絡を受け、医療支援の先遣隊として翌26日に出発することとなりました。当院には災害時を想定し、普段から資機材・食料などを整備したロジスティクスセンターがあります。今回の派遣要請後にも当センターから寝袋や蚊帳、通信機器などを即座に準備しました。資機材の手配のほか、本社とのやりとりなど準備を進め、翌朝、関西空港から出国しました。

■ 実際の活動

（1）先遣隊としての活動

先遣隊は事務要員2名、医師1名、看護師2名の計5名から成り、被災状況を調査し、その後の支援につなげていくことを目的としています。28日にネパールに到着し、国際赤十字の合同ミーティングに参加し、地震の被害状況や様々な団体の支援状況、各国赤十字社との協力体制などについて話し合いました。日本赤十字社は、ネパール保健省の要請で、家屋の9割が倒壊するなど最も被害の大きかったシンドウパルチョーク郡のメラムチ村という場所で活動することになりました。

29日にメラムチ村にある診療所の視察を行いました。まず目の当たりにしたのは、患者が溢れ混乱した状況の中、必死に対応する現地スタッフやボランティアでした。患者は余震を怖がって建物の中に入ろうとせず、全ての処置は診療所の外で行われていました。骨折、打撲などの外傷患者も多く、出血が続いている人、すでに傷が化膿している人、傷が腫れて歩行すら困難な人など一人一人の処置に時間を要しました。医療スタッフが不足していることは誰の目にも明らかで、私たち先遣隊が持っていた資機材を使用し、初日から診療に加わりました。



メラムチ村診療所。診療所の外は診察・処置等の患者であふれていた。

(2) 初動班としての活動

5月2日に緊急救援チームの第1班が到着し、日本赤十字社の活動が本格的に始まりました。チームは医師、看護師、臨床心理士、主事、臨床工学技士等15名から成り、主な活動は、①診療所における医療支援、②巡回診療、③被災状況のアセスメント、④こころのケア、⑤地域保健（健康教育）でした。

①診療所における医療支援

メラムチ村にある診療所（プライマリヘルスケアセンター）を拠点とし、現地の医師、看護師、助産師たちと協力して活動を行いました。震災直後は建物の倒壊によって発生した外傷患者が多く、創洗浄やギプス固定等を多数行いました。



日赤の整形外科医と共にギプス固定中。



現地の医師と協力し局所麻酔で傷の縫合を実施。

②巡回診療

ネパールは山岳地帯であり、3～4時間かけて診療所まで来る患者も多く、こういった方々のために、日本赤十字社は巡回診療を開始しました。道路状況が悪く、4輪駆動車でも数時間かかるような場所もありました。



平地を探し、テントを立てて診療開始。



下肢の外傷への処置。子供も多い。

③被災状況のアセスメント

メラムチ村周囲の村々におけるヘルスポスト（簡易診療所）の視察を行い、建物やスタッフの被災状況をアセスメントしました。ほとんどの建物は全壊もしくは半壊状態で、震災後に機能しているヘルスポストは非常に限られていました。被災状況に応じて、物資（テントや薬剤等）の提供や巡回診療を実施しました。



ほぼ全壊したヘルスポスト。物品は散乱し、活動は不可能。スタッフの多くも震災による被害のため、活動を継続するのは困難な状況でした。

④こころのケア

診療所や巡回診療における医療支援と並行し、被災者に対するこころのケアが臨床心理士により行われました。対象は大人、子供、診療所の患者、診療所のスタッフです。震災によりメラムチ村では小学校が一時的に閉校となっていたため、診療所の横にテントを立て、絵を書いたり歌を歌ったり、折り紙を折るなど子供たちの集いの場となるようキッズスペースを設置したり、大人に対しては災害後のストレス反応などについて図を用いて説明したり、また毎日患者への対応に終われる診療所のスタッフには、ヨガ教室を開くなどし、ストレス発散を促しました。



診療所横に設置されたキッズスペース。



日赤臨床心理士が子供たちに折り紙の折り方を説明。

⑤地域保健（健康教育）

初動班には地域保健の専門家も同行し、災害前の健康状態や災害による被災状況について詳しく情報収集を行いました。その結果、下痢性疾患や呼吸器疾患の流行への懸念があり、現地の学生ボランティアを中心とした健康教育を行うこととなりました。対象は診療所の患者、メラムチ村の小学校の子供たちや先生で、紙芝居や寸劇を通して、手洗いやうがいの必要性について言及しました。



診療所前で患者に対して健康教育を行う学生ボランティア

日本赤十字社の活動は第3班まで続き、7月末までの13週間で、診療所と巡回診療を併せて15,599人に治療を行いました。現在は復興支援として診療所や住宅の再建、また現地の病院における医療支援を検討しています。

■ さいごに

今回は、現地の診療所を軸とした緊急支援活動でした。自分たちも被災者でありながら災害直後から働き続ける現地スタッフを見て、私自身も非常に励まされました。現地のスタッフと協力し、またお互いの文化や方法を尊重し合いながら、終始良好な信頼関係が築け、第2班に活動を引き継ぐことができました。ネパール地震の犠牲者のご冥福を、また、1日も早く復興が進み、ネパールみなさんに笑顔が戻りますようお願いいたします。

最後になりますが、このような緊急救援活動にご理解、ご支援くださり、こころから感謝いたします。